

第54回中・四国保育学生研究大会に参加して

伊藤 由衣・沖田 舞・坂田恵理子
逸見 史織

はじめに

私たちは第54回中・四国保育学生研究大会に参加しました。開催場所は岡山県にあるくらしき作陽大学で、七木田方美先生が引率してくださいました。

保育学生研究大会に参加して

私たちは「大型迷路絵本を通した福島の親子との交流 ～はらぺこあおむしを題材に～」をテーマに発表しました。発表は入退場を含めて15分で、午前中に行われました。

講評では、四国大学短期大学部中村真理子先生からいただきました。阪神淡路大震災での子どもの姿と重ね合わせ、子どもの気持ちに寄り添うだけではなく、親の支援も大切であるという言葉をいただきました。質問の時間や発表がすべて終わったあとに、福島の親子支援について興味を持ってくださった先生もおられました。

最後の学生交流会では、各学校の学校紹介にあわせて、当番校のくらしき作陽大学の皆さん



くらしき作陽大学キャンパス

が素敵なパフォーマンスを披露してくださいました。この保育学生研究大会は、保育者を目指す人たちにとってとても有意義なものであると感じました。

研究発表の内容

私たちは、親子の愛着形成をテーマに研究を続けてきた。親子が触れ合ったり、楽しんだりできるような場を作りたいと考え、エリックカールの絵本「はらぺこあおむし」を題材に大型迷路絵本の作成に取り組んだ。

また、これを題材に広島だけではなく、福島の親子とも交流したいと考え、実際に広島を訪れた。

(1) 大型迷路絵本はらぺこあおむし

子どもだけではなく大人もよく知っている絵本であり、色合いやストーリーが魅力的な絵本である。あおむしが蝶になって羽ばたくまでを描いている。その瞬間を子どもが味わえるように絵本を忠実に再現し、様々な工夫を加えた。また、迷路にすることによって、子どもがドキドキしながら一步一步の歩みを自分で決めて進めるような場面を作った。

(2) 広島での予備調査

平成25年7月7日に開催された本学のある広島市東区の親子交流広場「ぼっぼひがし」にて約100組の親子を対象に大型迷路絵本を実施した。

広島市東区の予備調査では、初対面の子ども同士が共感しながら遊ぶ姿に目を細める親の姿



図1 大型迷路入口



図2 リンゴの穴で楽しむ親子

が見られた。特に、楽しそうに食べる場面で親が安心した表情で子どものことを喜んで見ている(図1 図2)

しかし、子どもがさなぎの場面で立ち止まり、蝶まで進めない子どもや、保護者が傍観していたり、過剰に声をかけたりという姿が見られた。親子が快く気持ちを重ね合わせられるよう、背景などを工夫して、蝶になる感動を親子がともに味わえるように改善した。

2. 福島での研究の目的

災害時、親子の愛情が一時的に深まる。しかし、福島の放射線量の高い地域では、子供を外で遊ばせることができず、家の中ではストレスがたまり、親が子に、子が親に、そのストレスを向けがちである。

そこで私たちは、乳幼児期の親子がともに楽しめる場を設定し、親子の心が楽しく通う瞬間を想像することにより、被災した土地の親子の現状と愛着形成を支えることを目的に研究を行った。

3. 研究の方法

(1) 対象

福島県福島市にある社会福祉協議会が設営する親子広場に来場した親子。

(2) 期間

平成25年9月24日から25日の2日間

(3) 調査内容

被災地での親子関係について、観察および保護者へのインタビュー調査を行う。

4. 福島での調査

福島市保健福祉センターの6階にあるおもちゃ広場で10時～15時まで活動した。

(1) 活動内容

①大型迷路絵本「はらぺこあおむし」

おもちゃ広場のフロアの一部で開放。

②はらぺこあおむしの読み聞かせ

時間を設定し、一日3、4回程度実施

③手遊び、わらべうた遊びなど

絵本と同じタイミングで実施。

④インタビュー調査

来場した親子のお母さんを中心とした保護者にインタビューを行った。



図2 リンゴの穴で楽しむ親子

(2) 大型迷路絵本を通して

予備調査と比較をし、福島での実施では館内に大型迷路絵本の実施をチラシで掲示していただきそれを見て楽しみにしてきてくれる親子の

姿があった。最初は怖くてなかなか進めなかった子どもたちも保護者や学生と行くことで迷路の楽しさを知り、こわばっていた表情から笑顔に変わり「また行きたい！まだ行きたい！」と何度も遊んでくれる姿があった。

保護者は楽しそうに遊んでいる子どもたちを見て目を細められていた。過剰に声掛けをすることもなく静かに見守ったり、子どもと壁に空いた穴からのぞきながら会話をしてコミュニケーションをとる姿があった。

(3) 予備調査からの改善点

「はらぺこあおむし」の音楽をかけることでイメージが広がり、月曜日にはリンゴを1つ食べるなど歌を聴きながら楽しんでいる姿が見られていた。最後の蝶を見てそこに子どもが立ち「きれいなちょうちょになれたね」と声をかけて楽しめた。

(4) インタビュー調査内容

今、一番聞きたいことは何かをゼミで相談し次の4点についてインタビューした。

表1 福島に居住する親子の保護者の現在の心境

分類	大項目	中項目	小項目
子ども	震災前	震災前の遊び(生活)	<ul style="list-style-type: none"> 夏は海へ出かけて遊んだ 散歩にもよくでかけていた 他とは変わらない普通の生活だった 歩いて移動することが多かった
	震災後	震災後の遊び(生活)	<ul style="list-style-type: none"> 室内の遊びが多くなった・運動機能の低下・外で遊べずイライラ... 地震が怖いという・甲状腺の問題(がん)・外遊びを知らない 死んだらどうなるの?という不安・震災のことを思い出したくない 砂遊びの経験がない(普通のことができない)
親	震災を経験して	震災後不安に思うこと(ネガティブ)	<ul style="list-style-type: none"> 外で遊ばせてあげられない・県外へ避難した・周りの目がきになる マタニティーブルーになった(妊娠中)・一人になると怖い 大きくなってみないと症状がどうなのか分からない(放射線、被爆) 本当にこれでいいのかな?と常に不安になりながらの子育て 大きい地震がくると今でも不安・甲状腺がどうなのか心配 普通の生活ですら不安に思う。
		震災後不安に思うこと(ポジティブ)	<ul style="list-style-type: none"> 福島に帰りたいと思う・原発の問題は気にしていない 助けてくれる人がいる・除染してからは外で遊ぶようになった 震災に対してのストレスはない・不安を考えていても仕方ない 気にしないようにしている(放射線) 今できることを力いっぱいするしかない
		運動状況(環境)	<ul style="list-style-type: none"> 運動機能の低下が心配・車移動が多くなった・安全に遊ばせたい 土、草、砂、花を触らせてあげられない(触ってはダメというのが辛い) 近くの公園は草がはえっぱなし・室内の施設を多く利用するようになった 食べるものに気を付けるようになった・水道水に気を付けるようになった 遠いところへ遊びに行くようになった・除染が終わっていても心配
		子どもに対する気持ち	<ul style="list-style-type: none"> 福島が大好き 福島はいいところだよって伝えたい・元気に育てほしい いつも見るよ、大好き・健康な体をもった大人に...・のびのび育て 思いやりのある子に育てほしい・人の痛みがわかる子に 「ありがとう」「ごめんなさい」がきちんとと言える子に・たくましく育て たくさんのことを学んで経験してほしい・笑って暮らせば十分
環境	震災を通して	放射能について	<ul style="list-style-type: none"> 外で遊んでいる子が少ない・室内の施設を多く利用する人が多くなった 除染作業が今でも行われている・見えないものへの恐怖を誰もが持つ 街中に放射線を測る測定器が設置されている 放射線を測る装置を持ち歩く

- ①大型迷路絵本の感想
- ②震災前と変化したこと
- ③子育てに対して不安に思うこと
- ④子どもたちに伝えたいこと

なお、質問調査は、保護者の了解を得てから実施した。

(5) インタビュー調査分析

インタビューの②③④の項目について、保護者が離された内容を「子ども」「親」「環境」を大きく3つに分類した。

「子ども」：震災前後の遊びや生活の変化。

「親」：震災後不安に思うこと（ネガティブ）（ポジティブ）、運動状況（環境）、子どもに対する気持ち。

「環境」：震災を通しての変化、放射線について以上の3分類からさらに、それぞれの項目ごとに、再度分類した。分類の結果は表1に示す。

5. 考 察

福島に行ってみるまでは、被災地はどうなっているのか全く想像が付かなかった。福島の方々が私たちを受け入れてくださるのか、放射線や地震などの不安があったが、福島の方々はみんな心が暖かく私たちを迎えてくださった。話を聞いてみると毎日放射線の不安などを抱えながら子育てをされていた。また、外で遊ぶこ

とがまだまだ制限されるため、遊ぶ場所に苦勞されていた。それを聞いて自分たちの周りでは想像が付かず衝撃を受けた。

大型迷路絵本で遊んでいる子どもの姿を見ていつもとは違う空間を楽しんでくれていたのではないかと考えた。

また、笑顔で受け答えしてくださる保護者ばかりでしたが、「子どもに伝えたいこと」の質問に、涙を流される保護者の姿もあった。保護者は、今も地震や見えないものへの恐怖（放射線）、将来の子どもの病気などの不安を抱えて生活されている。自分のことよりも子どものことを気にかけて、本当にこれでいいのかという疑問をもちながらも明るく前向きに子どもと共に毎日を過ごされていることが推測できた。

そして一番私たちが印象に残ったのが福島に住んでいるお母さんは「震災があっても福島が大好き」と言われていたことである。こういった悲しい出来事が起こっても自分が生まれ育った場所を大切に思う姿に私たち自身も生まれ育った場所を大切にしようと思った。

VII ま と め

大型迷路絵本を通して、多くの親子が笑顔になる瞬間を見ることができた。福島親子と交流して、いつ何が起こるかわからない状況の中、子どもと過ごす時間を大切にすることで親子の結びつきが深まっていると感じた。